

メキシコにおける高大接続への試み

—— わが国の大学教育改革への示唆 ——

落 合 一 泰*

Bridging secondary and higher education in Mexico: Suggestions for the university reform in Japan

Kazuyasu Ochiai*

要旨：本稿は、メキシコにおける高等教育を概観するとともに、「高大接続」をめぐる高校生の展望、そして大学初年次学生が抱える問題点と大学側の対応等に関するメキシコの研究情報を整理し、わが国の大学教育改革を振り返る機会とすることを目的とする。

キーワード：メキシコ、高大接続、学生の社会経済的背景、大学中退率、アドバイザー、「学士資格総合検定試験」(EGEL)

Abstract : This paper outlines Mexican higher education and examines some research reports on the perspectives and difficulties that high school senior students and college first-year students have for their studies and future careers. The author finally picks up some suggestions from Mexican cases for the reform of Japanese college education.

Keywords : Mexico, secondary and higher education, retention rate of college students, first orientation and academic advising, General Examination for Graduation (EGEL)

1. はじめに

本稿の目的は、メキシコ合衆国における高等教育を概観するとともに、「高大接続」をめぐる高校生の展望、そして大学進学を果たした初年次学生が抱える問題点と大学側の対応等に関するメキシコの研究情報を整理し、わが国の大学教育改革を振り返る機会を得ることにある。

筆者は、2017年10月20日に、メキシコシティのメキシコ工科大学に拠点を置く国立機関「調査・高等研究センター」(Centro de Investigación y Estudios Avanzados, CINVESTAV)において、日本の高等教育と筆者が勤務する明星大学の初年次教育に関するワークショップを開き、高等教育論、中等教育論を専門とする13名の出席者(メキシコ各地の大学教員および大学院生)に対する情報提供と質疑応答を行った。¹本稿は、ワークショップにおいて得た情報、メキシコ国内で発表されている高大接続や大学初年次に関する研究論文、中等教育に関する研究書、メキシコ教育省の統計等に基づくものである。

ワークショップ出席者によれば、メキシコでは体系的な初年次教育の必要性はほとんど意識されていない。日本の事例紹介とその背景説明を筆者が行ったさい、メキシコの大学関係者から驚きの声が上がリ、筆者は多くの質問を受けた。とくに、全大学平均11%とも言われる中途退学率の低減が日本の大学にとり重要な課題であることを説明した際、メキシコの大学では最初の2セメスターでの退学者が30%から40%に達するが、これまで大きな問題とされたことがなく、11%はわれわれの目標値になるかもしれないという冗談が出たほどであった。日本の大学の取り組みに関する理解が進んで後は、メキシコの大学における初年次教

* 明星大学明星教育センター 常勤教授
Professor, Meisei Education Center, Meisei University. E-mail: kazuyasu.ochiai@meisei-u.ac.jp

育の必要性や応用可能性について、出席者の間で意見交換が続いた。

メキシコは、16世紀にアステカ王国がスペインの軍事的征服を受け、1821年の独立まで300年にわたりスペインの支配下にあった。その間に言語を含めた生活全般のスペイン化が進み、19世紀後半には外資導入による近代化も図られた。1910年にはメキシコ革命が勃発して社会主義的分配に意を用いた政権運営が続いたが、近年は新自由主義的政策が力を持ち、隣国アメリカ合衆国との政治的経済的関係がますます緊密になっている (Beezley & Meyer 2010)。このように、現代メキシコの高等教育の背景をなす社会状況や歴史環境は、日本のそれとは大きく異なる。しかし、グローバル化した21世紀社会を生き、それに貢献する次世代の育成という点において、日本とメキシコの高等教育界は共通の使命をもつ。メキシコ初年次学生の抱える問題点と解決への取り組みのなかには、わが国の大学初年次教育を客観的に見る手がかりがあるかもしれない。そうした探索的目的をもつ本稿は、いまある現象の因果関係の解明を目指す研究ではなく、課題発見に向かうための基礎作業にほかならない。

2. メキシコの教育システム

最初に、メキシコの教育システムを概観しておきたい。日本の5倍の国土を持つメキシコは、人口が1億3000万人を超え、1億2600万人の日本をしのぐ(2017年)。メキシコと日本の人口ピラミッド(図1, 図2)を比較すると、メキシコでは19歳以下の人口が最大ではあるが、釣り鐘形に近づいており、いまから1～2世代ののちには、メキシコも18歳人口の低下を迎える可能性がある。実際、2012年-2013年のメキシコの15歳-17歳人口は、6,737,646人だったが、2021年-2022年には、6,608,334人と14万人近い減少が予測されている (Benítez 2015:44)。3歳から14歳の人口については、2004年から2016年の間に、すでに50万人の減少があったと報告されている (Secretaría de Educación Pública 2017:282)。



図1 メキシコの人口ピラミッド (2017)

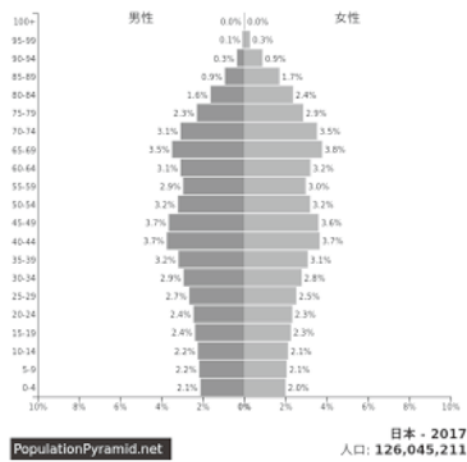


図1 日本の人口ピラミッド (2017)

出典：<https://www.populationpyramid.net/ja>
2018年1月10日閲覧

メキシコ政府の公教育省 (Secretaría de Educación Pública, 以下 SEP) が管轄する教育システム (Sistema Educativo Nacional) は、基礎教育、中等教育、高等教育の3段階から成る。基礎教育は、幼稚園3年、小学校6年、中学校3年、中等教育は、高等学校2年～3年、技術・職業訓練校3年、高等教育は、技術専門学校2年～3年、大学学士課程4年～5年、大学院(専門課程1年～2年、修士課程2年、博士課程2年～4年)で構成されている。メキシコでは中学校までが義務教育であったが、2013年の法改正で中等教育修了(高校卒業)までが義務化された。しかし、実現には至っていない(外務省 2016)。

設置大学数は国公立大学が340校、私立大学が90校、合計430大学である (Universa México n.d.)。メキ

シコの高等教育人口は、大学院就学者を含め、2,981,313人(2010-2011年)、3,419,391人(2013-2014年)、3,762,679人(2016-2017年)と、6年間に27%も増加している。そして、2013-2014学年暦における高等学校最終学年生の31.1%が高等教育機関に進学した(Padilla González, Figueroa Ruvalcaba & Rodríguez-Figueroa 2017:2)。そのうち、14%から16%が大学の学士課程に在籍する学生であり(ibid.: 3)、前者から後者を差し引いた15%程度が、高等学校卒業後に学士課程以外の専門学校等の高等教育機関で学ぶ学生である。日本の4年制大学進学率52.6%(2017年)に比べれば16%は高くないが、絶対数において急速の伸びを示していることには変わりない。

日本の大学にない制度として、メキシコには、「学士資格総合検定試験」(Examen General para el Egreso de la Licenciatura, EGEL)という国家試験がある。すなわち、教育は各大学が実施するが、学士号の質的保証は各大学ではなく国家によって行われている。学士課程修了には4年から5年の勉学が要求され、その期間に課程修了するのは入学者の40%から50%程度と見られている(loc. cit.)。

以上のことから、メキシコの高等教育は次のように概観できるだろう。

1. メキシコの高等教育進学率は、マス段階(15%～50%)にある。
2. 高等教育進学者が増加しており、内訳では、大学学士課程入学者と専門学校等入学者がほぼ拮抗している。
3. 学士資格総合検定試験により、学士資格が国家により統御・保証されている。
4. 他国に比べ留年率・中退率が高く、メキシコの大学は、一般に入学より卒業が難しい。

3. メキシコの大学における初年次

高等教育においては、初年次の過ごし方とそこでの経験が、学生の学業継続に決定的な重要性をもつことを、これまで多くの研究が示してきた(e.g., Crissman & Upcraft 2005, Fike & Fike 2008, Tinto 2012)。しかし、初年次を重視する理由は、国によりさまざまである。初年次教育先進国とされるアメリカ合衆国では、First-Year Experience, Transfer-Year Experience という用語が示すように、入学先の大学あるいは転学編入先の大学という新たな環境での経験が円滑に進むよう、また、その後の専門課程での学習への取り組み意欲が向上するよう、初年次教育が設計され実施されている。4年制大学への進学率がユニバーサル段階に入ったわが国では、大学受験競争に主眼をおく中等教育から、自立的学習が求められる高等教育環境へと大学新入生を導くために、高大接続の一環として初年次教育の必要性が唱えられ、2015年には全大学の82%にあたる614大学で初年次教育が進められるようになった(文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室 2017:1)。

メキシコの高等教育には、別の事情が存在する。先述のように、メキシコでは入学者の30%から40%が初年次(最初の2セメスター)で脱落すると言われている。これまでは授業料も低廉であり、優秀な学生が残ればよいという暗黙の方針があり、中退者は自己都合として放置されてきた。上記ワークショップでの発言によれば、大学側は、中退者の多くが生産年齢人口に属し、貧困層の場合は家計維持者の道を選ばざるを得ないことも多く、労働と勉学の両立を当初は模索するものの失敗に終わり、退学する者が多いという認識にとどまってきた。しかし、国公立大学でも授業料が以前より引き上げられ、高い授業料に応じた優れた教育で成果を出す私立大学が評価を得るようになるにしたがい、授業料収入の重要性が増し、経営上の理由からも退学者の減少策を講じる必要が出てきている。貧困という学生側の要因のみで中退を説明し終えるのではなく、大学内の教育努力で学生のつなぎ止めを行い、貧困以外の要因による中途退学を低減させようという動きが始まりつつある。メキシコでは年少者の人口は漸減傾向にあるが、現時点では大学入学世代の人口はほとんど減少しておらず、高等教育機関への入学志望者は増加している。この機をとらえての大学間競争が高まっていることも、入学者へのケアという新たな取り組みを大学に促す背景を形成していると考えられ

る。

4. メキシコの大学における初年次学生へのケア

メキシコでは体系的な初年次教育はまだ実践されていない。しかし、アグアスカリエンテス自治大学 (Universidad Autónoma de Aguascalientes) の研究者数人が、近年、卒業間近の高等学校生徒や大学初年次学生、およびアドバイザーに対するアンケート調査や面接調査を始めているとの教示を、上記ワークショップ参加者から受けた。アグアスカリエンテス州はメキシコ中部に位置し、教育を受けた労働力が比較的豊かな地域であることから、隣接するグアナフアト州とともに、日本の自動車産業等の進出が盛んな州でもある。

本稿では、入手した関係4論文・報告について簡単に紹介し、メキシコにおいて始まりつつある高大接続への関心のありかを明らかにしたい (Padilla González & Figueroa Ruvalcaba 2015; Padilla González, Figueroa Ruvalcaba & García-Medina 2015; Figueroa Ruvalcaba, Padilla González & Guzmán Ramírez 2015; Padilla González, Figueroa Ruvalcaba & Rodríguez-Figueroa 2017)。

すべての論考に共著者として名を連ねる Laura Elena Padilla González と Alma Elena Figueroa Ruvalcaba は、ともにアグアスカリエンテス自治大学社会科学人文センター教育学科に所属し、中等教育・高等教育機関とそのステークホルダーを研究対象とする教育学者である。

(1) Padilla González & Figueroa Ruvalcaba 2015

本研究は、大学生が直面する困難に関する質問票調査の結果を示すとともに、新入生の学生の相談に乗るオリエンテーション・アドバイザーの視点から、学習放棄を防ぐ制度的戦略を考察している。本研究に協力したオリエンテーション・アドバイザーは、公立大学私立大学に所属する7人である。また、大規模公立大学から、卒業までの学習面のアドバイジングを行うアカデミック・チューターが2名、本研究に協力した。

研究結果は、①学生が求める情報を過多にならない形で提供する仕組みの必要性、そして、②学生相談に臨むにあたり立てられるべき戦略の重要性、のふたつを示している。

①は、学生のニーズと大学側の考え方の一致を図ることが、学生の学年や専門に対する社会的感情的アイデンティティをはぐくみ、学習面での挑戦に立ち向かう力や自主的かつ責任ある学習能力を向上させ、結果として退学率の低減に資するという予測につながっている。

②の前提認識は、新入生はしばしば、何を専攻するのが決まらない不安、入学後に続く基礎学習が自分の職業的野心にどのように役立つのか不明という疑念、学習力不足・学習習慣不足・時間管理能力不足等の自覚、大学が求める学術的挑戦への不確かさ等をもつという観察である。²その解決のために、オリエンテーション・アドバイザーは、学生の入学段階での期待に対応する時間割作成に協力することが大切であるとする。また、学年進行とともに浮上する学生の不安として、卒業後の収入、卒業後の就職困難、学んだ課程に結びつかない仕事への意に染まぬ就職等が挙げられている。さらに、学年を問わずに学生が抱える可能性のある問題として、大学という権威への反発、自身の性的傾向への悩み、職業的アイデンティティへの疑問、家庭内の諸問題、妊娠、恋人からの暴力、病気、家族からの期待に応じなければならない義務感への不安などが列挙されている。

チューターの観点からは、学年ごとに異なるアプローチの仕方が提言されている。すなわち、初年次学生の場合は、大学生生活への適応に注力すべきであり、2年次の学生には学習進捗状況の確認、3年次には卒業に必要な科目の履修の過不足のチェック、4年次・5年次には「学士資格総合検定試験」(EGEL) 対策に協力すること等が必要であるとする。

(2) Padilla González, Figueroa Ruvalcaba & García-Medina 2015

本論は、アグアスカリエンテス州で卒業を控えた高校生を調査対象とし、高校から大学に進学する期待感と社会経済関係・家族関係の関連を明らかにした研究である。調査に協力した2,113名の高校生のうち、87.5%が大学進学を希望し、全体の61.1%が、経済的理由から、仕事と勉学の両立を図る必要があると回答した。分析の結果、次の諸点の間に、統計学的に有意な相関が認められた。すなわち、進学志望、年齢、社会経済的水準、勉学への取り組み意欲、家族からの支援等である。さらに、大学入学、社会経済的水準、成績、男性ジェンダー認識の間には有意な相関関係があること、経済的要因による退学が統計的に確認されたこと、家族からの広い意味での支援が得られない場合には成績不良になる傾向があること、などの結論が得られた。

(3) Figueroa Rubalcava, Padilla González & Guzmán Ramírez 2015

アグアスカリエンテス州において2012-2013学年暦に最終学年を迎えていた12,090人のうち2,552名に質問票を送付し、大学進学希望について尋ねた調査である。本人の成績、家族関係、学校状況なども質問し、諸要素間の相関分析を行った。高等教育を志望しない者が12.5%、仕事と学習の両立希望者が61%、学業専念希望者が26.5%であった。同時に、両親の学歴、家族の勉学評価に関する生徒の認識、家庭内での勉学支援、成績、勉学環境意識などについても質問した。

回答者の大学進学希望率は高い。ただし、高校生が家庭の経済・社会資源が不十分と認識している場合、家庭の支援が受けられないと認識している場合、あるいは勉学に意義を認めない家族であると認識している場合には、高等教育への移行がうまくいかない可能性が高いことが実証された。仕事と学習の両立を希望する61%の層にとり、学習専念を前提とするカリキュラムは実行が困難であり、中退率の低減を図るためには、その解決が必要であると本論は指摘する。なお、学業と労働を併行する必要のない富裕層においても、自立生活を目指して仕事を希望する場合が認められた。

(4) Padilla González, Figueroa Ruvalcaba & Rodríguez-Figueroa 2017

論文(1)の質問票回答者のうち、大学に進学した40名に対し、追跡調査をインタビュー形式で行った研究である。アグアスカリエンテス州の高校生の学習意欲、進学希望の有無、個人、家族、成績等の指標と、実際に大学に入学した後の初年次経験の関係を分析している。

その結果、高校時代の勉学意欲と進学希望と同じく、初年次における成績と当人の社会経済的状況、家族からの支援意識等の間には、有意な相関があることが判明し、家庭状況が学生の学業パフォーマンスに大きな影響を与え、学生間の社会経済的格差を存続ないし増大させる可能性が確かめられた。

5. おわりに

以上のメキシコ高等教育の概観と高大接続に関係する近年の研究から、私たちは、何を学ぶことができるだろうか。

メキシコで大学中途退学者の割合がたいへん高い要因として、貧困問題が指摘されている。社会性を背景とする以上、「貧困」という用語が日本とメキシコで同一の意味を持つとは言えないが、わが国でも子供の貧困率が13.9%(7人にひとりが貧困)(厚生労働省 2017:15)とされる今日、社会経済的に困難をかかえる次世代への対応は、高等教育機関にとり重要な課題である。現在、政府は幼児教育とともに高等教育の無償化方針を掲げており、今後、その制度設計が進むなかで、学生の学業と収入確保の両立問題は重要な検討事

項になるだろう。メキシコの各大学が、大学初年次学生の中退の主因とされる貧困問題に対し、いかなる対処を試みようとしているのかは、わが国の大学にも参考になる部分があるかもしれない。

ワークショップ参加者から聞いたところでは、メキシコでは、オリエンテーション・アドバイザーやアカデミック・チューターの活動は大学の実情と必要に応じ個別に行われており、その活動を研究対象として取り上げるのは、まれとのことだった。しかし、上記の論文(1)からは、初年次学生の大学へのより良い適応と中退率の低減を目指すことが、メキシコでも重視されるようになってきたことが、うかがえる。高等教育中退率が日本の3倍から4倍あると言われるメキシコは、G20の一角をなし、OECDにも参加する国家である。グローバル化が進展するなかで、教育の質的向上をアジェンダ化しなければならないという政治的背景もあるのだろう。高等教育人口が大幅に増加しつつも、近い将来には少子化の到来を予測しなければならないメキシコは、成績や経済状況というふるいにかけてられた入学者のみを教育対象とするエリート段階から、多様な学生を多数受け入れ、「学士資格総合検定試験」(EGEL)に合格する質の良い学生に育てていくマス段階への移行の過程にあると言えるだろう。

擱筆する前に、高大接続という本稿のテーマからは離れるが、メキシコの事例が日本の高等教育改革について気づきを与えてくれる点を、派生的研究ノートとして、ひとつ指摘しておきたい。それは、EGELである。

EGELは、それに相当する国家が行う学士資格検定試験制度のない日本の大学における「卒業」と「学士号の質保証」とは何かを、改めて考える手がかりを与えてくれる。文部科学省大学設置基準は、第三十二条(卒業の要件)において「大学に四年以上在学し、百二十四単位以上を修得することとする」と定め、各大学は、第七条(教員組織)が規定するように、「2 [中略] 教育研究に係る責任の所在が明確になるように教員組織を編制するものとする」。これらの条項に基づき、各大学は、教育成果の「責任の所在が明確になるよう」、学部学科教授会に教育課程の実施を委任している。すなわち、学部学科教授会は、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの策定、それらに基づく入学者選抜試験の実施と合格者判定、教育実践、卒業判定にいたるすべての過程を任されている。いわば学士専門教育にかかる制度設計から成果評価まで、すべてを学部学科教授会の内部でまわしており、そこに教授会自治の根幹が存している。その業務責任を問う外部監査を許す仕組みは、そこにはない。たとえば卒業判定教員会議は、学士課程専門教育を担う各学部学科教授会のなかで閉鎖的に行われるのが通例である。日本の大学において専門課程教育担当教員に強い権限が付与されているのは、このような閉鎖性によるところが大きい。

メキシコの場合、大学卒業=学士号付与ではない。大学は高等教育を担当し、学士課程(licenciatura)での学修を充足したことを証明する。他方、学士資格(licenciado, licenciada)の認定は、専門分野ごとの国家検定試験(EGEL)の結果に基づく。学士課程教育と学士資格認定が分化しており、EGEL合格率の低い大学は、その課程教育の質が問われる仕組みである。わが国では、類似の制度が、医学部医学科学士課程(文部科学省の管轄)と医師国家試験(厚生労働省の管轄)に見られる。前者の修了判定は医学部教授会にかかるが、それをもって医師国家資格が得られるわけではない。別途の国家試験に合格して初めて医師を名乗ることができる。医師国家試験合格率の低い大学は、その教育力が問われることになる。医学科卒業生のすべてが医師を目指すとは限らないが、密接な関係にある課程学修と資格試験を制度的に分離することにより、課程教育の質保証を実現する方向性を維持してきたとは言えるだろう。

メキシコのEGELの例が示す「学位の質保証」は、グローバル化時代の高等教育における最重要のテーマのひとつである。ポローニャ・プロセスが目指してきた、EUの国ごとに異なる学位の相互認証可能性、学位の質保証の手段としての「チューニング」(tuning)の推進、学習で得た能力(learning outcomes)の視覚化と比較参照性の拡大等は、学生や教員のグローバルな流動化の時代における、教育課程と学位の質保証にかかわる事業といえるだろう(cf. 川嶋 2008; ゴンサレス&ワーヘナール 2012; 吉川 2012)。また、2008年5月に文部科学省高等教育局長が日本学術会議に発した「大学教育の分野別質保証の在り方に関する審議について」と題する依頼で始まった、「学位の水準の維持・向上など大学教育の分野別質保証の在り方」の検討、およびその結果としての日本学術会議による専門分野別の「参照基準」策定も、教育課程における

ラーニング・アウトカムズ重視の流れに沿い、学生の流動化の推進基盤となる学位の国際的通用性を視野に入れたものである (cf. 日本学術会議 n.d.)。

このような副次的考察も含め、メキシコにおける高等教育の進展、高大接続、忍び寄る少子化、歴史と社会経済構造に根差す貧困問題、学位の質保証等に対し、メキシコ教育界が示す姿勢には、比較教育的観点からも実践的側面からも注視するに値するテーマが数多く見られる。筆者は、メキシコの事例に関する情報収集を今後も進め、わが国の高等教育改革の参考に供したいと考えている。

注

- 1 このワークショップ (Taller sobre retención de nuevos estudiantes universitarios) は、2017年10月18日・19日に開催された CINVESTAV とポルトガルのリスボン大学研究所共催の「科学の多国間流動に関する第2回国際セミナー—科学の国際協力と流動性に関する地政戦略の視点」(El Segundo Seminario Internacional sobre Movilidad Científica Transnacional “Perspectivas geoestratégicas sobre colaboraciones y movilidades científicas internacionales,”) の翌日10月20日に、同研究所で開かれた。国際セミナーに筆者を招聘し開会講演 (Ochiai 2017) の機会を与えてくださったシルヴィ・デイドゥ CINVESTAV 教授、ワークショップ開催にご尽力くださったロサルバ・ラミレス CINVESTAV 教授、ワークショップ参加者各位、研究資料を提供して下さったアグアスカリエンテス自治大学ラウラ・パディジャ教授に対し、心からの感謝を申し上げます。
- 2 ここに列挙されたメキシコの大学初年次学生の懸念は、全米調査 (2010年) で大学初年次学生が困難と感じている項目と同種と考えられる。濱名 (2013:56) は、それらを「タイムマネジメント」、「効果的に学習技術を身につける」、「大学の学問的要求水準への適応」に整理している。

参考文献

- 外務省 2016 「諸外国・地域の学校情報:メキシコ」。http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/04latinamerica/infoC43300.html (2018年1月10日閲覧)
- 川嶋太津夫 2008 「ラーニング・アウトカムズを重視した大学教育改革の国際的動向と我が国への示唆」『名古屋高等教育研究』8:173-191。
- 厚生労働省 2017 『平成28年 国民生活基礎調査の概況』。<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/dl/16.pdf> (2018年1月10日閲覧)
- ゴンサレス、フリア、ローベルト・ワーヘナール (共編) 2012 『欧州教育制度のチューニング—ポーロニャ・プロセスへの大学の貢献』(深堀聰子・竹中亨共訳)、明石書店。
- 濱名篤 2013 「初年次教育の国際的動向—内容・方法と評価」、初年次教育学会 (編) 『初年次教育の現状と未来』pp.55-66、世界思想社。
- 日本学術会議 n.d. 「大学教育の分野別質保証委員会」。<http://www.scj.go.jp/ja/member/iinkai/daigakuhosyo/daigakuhosyo.html> (2018年2月14日閲覧)
- 文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室 2017 「平成 27年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要)」(平成29年11月21日)。http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_icsFiles/afieldfile/2017/11/21/1398426.pdf (2017年12月10日閲覧)
- 吉川裕美子 2012 「学位の質保証」『日本教育行政学会年報』38:144-147。
- Beezley, William, & Michael Meyer 2010 *The Oxford History of Mexico*, Oxford University Press, Oxford and New York.
- Benítez, Germán Sergio 2015 “Educación media superior: oferta actual y desafíos para la universalización de su cobertura,” En: Rodolfo Ramírez Raymundo, Coordinador, *Desafío de la Educación Media Superior*, pp.15-80, Instituto Belisario Domínguez, Senado de la República, Mexico D.F.
- Crissman, J. & Upcraft, M. L. 2004 “The keys to first-year student persistence.” In: M. Lee Upcraft, John N. Gardner & Betsy O. Barefoot, eds., *Challenging and supporting the first-year student. A handbook for*

improving the first year of college, pp.27-46, Jossey-Bass, Hoboken, New Jossey. https://www.ncsu.edu/uap/transition_taskforce/documents/documents/TheKeystoFirst-YearStudentPersistence.pdf (2018年1月9日閲覧)

- Figueroa Rubalcava, Alma Elena, Laura Elena Padilla González & Cintya Guzmán Ramírez 2015 “La aspiración educativa y la experiencia de ingreso a la educación superior de los estudiantes que egresan de bachillerato en Aguascalientes, México,” *Pensamiento Educativo. Revista de Investigación Educativa Latinoamericana* 52:1:18-32
- Fike, David. S. & Fike, Renea 2008 “Predictors of first-year student retention in the community college,” *Community College Review* 36:2:68-88. <http://go.galegroup.com/ps/i.do?id=GALE%7CA186270792&v=2.1&u=fondoconacyt&it=r&p=AONE&sw> (2018年1月9日閲覧)
- Ochiai, Kazuyasu 2017 “Transferencia intercultural de conocimientos: Estrategia formal y comunicación sustantiva,” Conferencia inaugural, *El Segundo Seminario Internacional sobre Movilidad Científica Transnacional “Perspectivas geoestratégicas sobre colaboraciones y movilidades científicas internacionales,”* coorganizado por el Centro de Investigación y Estudios Avanzados, México, y el Instituto Universitario de Lisboa, Portugal, CINVESTAV, México, D.F.
- Padilla González, Laura Elena, & Alma Elena Figueroa Ruvalcaba 2015 “Variables socio-familiares presentes en la transición de los egresados del bachillerato a la educación superior en el estado de Aguascalientes y su elección de carrera e institución,” *Caleidoscópico* 33:97-114.
- Padilla González, Laura Elena, Alma Elena Figueroa Ruvalcaba & Adán Moisés García-Medina 2015 “La expectativa de transición a la educación superior entre los estudiantes de último grado de bachillerato,” XIII Congreso Nacional de Investigación Educativa, Tema: Procesos de Formación y Actores de la Educación, pp.1-11, Chihuahua.
- Padilla González, Laura Elena, Alma Elena Figueroa Ruvalcaba & Héctor Manuel Rodríguez-Figueroa 2017 “La incorporación a la universidad de los estudiantes en Aguascalientes. La perspectiva del orientador educativo,” *Sinéctica* 48:1-19.
- PopulationPyramid.net n.d. 「世界の人口ピラミッド(1950～2100年)」。 <https://www.populationpyramid.net/ja> (2018年2月10日閲覧)
- Secretaría de Educación Pública
 2011 *Sistema Educativo de los Estados Unidos Mexicanos: Principales Cifras 2010-2011*, Dirección General de Planeación y Programación, Secretaría de Educación Pública, México, D.F. http://www.planeacion.sep.gob.mx/Doc/estadistica_e_indicadores/prineipales_cifras/principales_cifras_2010_2011.pdf (2018年1月9日閲覧)
 2014 *Sistema Educativo de los Estados Unidos Mexicanos: Principales Cifras 2013-2014*, Dirección General de Planeación y Programación, Secretaría de Educación Pública, México, D.F. http://www.planeacion.sep.gob.mx/Doc/estadistica_e_indicadores/principales_cifras/principales_cifras_2013_2014.pdf (2018年1月9日閲覧)
 2017 *Sistema Educativo de los Estados Unidos Mexicanos: Principales Cifras 2015-2016* http://www.planeacion.sep.gob.mx/Doc/estadistica_e_indicadores/principales_cifras/principales_cifras_2015_2016.pdf (2018年1月9日閲覧)
- Tinto, Vincent, 2012 *Completing college: Rethinking institutional action*. The University of Chicago Press, Chicago.
- Universia México n.d. “Universidades en México.” <http://www.universia.net.mx/universidades> (2018年1月10日閲覧)